

生物多様性の向上に向けた 名古屋市の取り組みについて

増田達雄

2010年10月、「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」が名古屋市で開催されます。このCOP10は、各国の政府代表や国連機関、NGOなど数千人が集まり、3週間に渡り議論する世界トップクラスの環境分野の国際会議です。

名古屋市では、COP10を単に会議の開催だけに終わらせることなく、COP10を契機に、なごや市民が生物多様性を理解し、その保全に配慮したライフスタイルへ転換していく機会にしたいと考えています。現在、そのための指針となる「生物多様性なごや戦略」の策定を進めるとともに、市民ムーブメントに繋がる取り組みを実施し、人と自然が共生する持続可能な都市なごやをめざしています。

1 生物多様性なごや戦略の策定

「生物多様性なごや戦略」では、太古のなごやの姿、自然と上手に共生していた100年前の姿、急激に変化した姿を確認し、現在のなごやの活かすべき特色と改善すべき課題を整理します。これらを踏まえ、右の3つの視点から、望ましいなごやの姿を描いていきます。

3つの戦略イメージ

いのちのつながりを感じるひとづくり
心の豊かなくらしを取り戻し、恵みに感謝する心を育む

風土に適したくらしづくり
歳時記や伝統文化のよさを思い返し、無駄のない消費と生産、季節にあった衣食住を培う

自然の摂理に即したまちづくり
自然の力を受け入れる都市のあり方を見つめなおし、なごやらしい自然の確保をめざす

2 生物多様性に係る市民ムーブメントの形成

戦略の策定と並行して、「身近な自然に触れる」、「暮らしの中の生き物を感じる」の2本柱で、複数の市民協働プロジェクトを展開しています。

今回は、このうち「名古屋ため池生物多様性保全協議会」の取り組みをご紹介します。

都市化の進展により生物の生息環境が失われ、メダカやゲンゴロウ等のかつては身近に見られた種が、市内では絶滅危惧種となっています。一方、市内には東部丘陵地を中心に111個のため池が現存し、大都市には珍しい豊かな生態系が残っています。

この貴重な生態系を守るため、昨年10月、地域住民、市民団体、名古屋市の協働により、協議会を立ち上げました。10箇所のため池をモデルとして選定し、生物多様性の調査と保全再生の活動を行っています。

生物多様性の調査では、名古屋昆虫同好会、愛知県野鳥の会、ため池の自然研究会などのご協力を得て、約350名の市民調査員とともに、ため池とその周辺に棲む動植物の調査を行っています。

保全再生活動では、今年1月に緑区の笹池で、市民130人の参加を得て池干しを行い、ブラックバスなどの外来種を駆除しまし

◆生物多様性に向けた名古屋市の取り組みについて

◆矢作川中流域の希少植物

◆ほとんどが絶滅の危機！ 愛知県の淡水産二枚貝

◆矢作川のいきもの・オオミズアオ

◆第5回「矢作川 森の健康診断」が開催されました！

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

e-mail yahagi@yahoo.co.jp

http://yahagigawa.jp



イシモチソウ 2009.6.8 豊田市白山町

た。池干しでは、鯉・ヘラブナが多い反面、モツゴ・スジエビなどの在来の小型生物が顕著に少なく、住宅街にある籠池は生物多様性が乏しいことがわかりました。この秋には、昭和区の隼人池での池干しを予定しています。

農業の衰退で人との係わりが薄れてしまった「ため池」ですが、協議会を通じ、人とため池のネットワーク再構築により、都市における貴重な生態系として保全再生を行っていきます。

(ますだ たつお、名古屋市環境局生物多様性企画室長)



籠池の池干し

矢作川中流域の希少植物

村松正雄

愛知県の植物相をはっきりとさせて記録に残し、それをもとに愛知県植物誌をつくらうと愛知県植物誌調査会を立ち上げたのが1992年。標本も10万点近く集積し、県内の植物相の全貌もかなりはっきりしてきたところで植物誌に先立って出版したものが「植物からのSOS」（1996年）であった。それを機に愛知県自然環境課が動き出し、県のレッドデータブック（RDB）が2001年に刊行された。そして、早くも改訂の時期を迎え、2010年のCOP10に合わせてかは分らないが、この春に2009年版が出版された。

その調査のために県内をよく歩いてきたが、隅々まで歩くことはとてもできない。矢作川流域に至っても同様であるが、矢作川へは頻繁にヤナギ類の調査に訪れたので、非常に思い入れが強い。1本1本に札をつけ、春先の花、夏になってからは葉の観察と1株について年に最低2回は訪れている。



図1 オオタチャナギの雄株、花



図2 同、夏葉

矢作川には県内で始めての自生を確認できたオオタチャナギの雄株が見られる（図1、2）。おしべの先の葯が赤いのが特徴である。雌株は流域に沢山あるが、雄株は数株のみである。

さらに希少なヤナギとしてキヌヤナギがある。県のRDBでは準絶滅危惧（NT）に位置づけられており、木曽川、庄内川、矢作川中流域に自生し、雌株が数株見られる。雄株は栽培され、ところどころで見られる。ヤナギ類は分類、分布がはっきりせず難問が山

積みされている現状である。

川岸の岩場を好んで生えるサワヒメスゲ（図3）は、自生地が何ヶ所か見つかったのでNTから除外されたが、矢作川中流域と木曽川、庄内川に限って生育する。

さらに危険度の高い絶滅危惧Ⅱ類（VU）にされているテリハキンバイ（図4）とヒメクラマゴケ（図5）が矢作川中流域の県道沿いの土手で見られる。拡幅工事等がなされると消失してしまうので注意してもらわなければならない。

テリハキンバイは、バラ科でミツバツチグりに似ているが、名前の通り葉にやや光沢がある。県内ではここで見られるだけであり、西日本系の植物で、ここが東限になるので大変重要な意味をもつ植物である。

ヒメクラマゴケはイワヒバ科に属し、テリハキンバイの自生地とほぼ同じところに見られる。シダ植物のなかまで、地面をマット状に匍匐し、夏から秋にかけて、ところどころから10cm程度の直立茎を伸ばし、その先端部に胞子をつける。県内では、知多半島の南部にもう一群落があるだけである。今後より一層調査に励み、植物相の解明に寄与していきたい。

(むらまつ まさお、愛知県環境審議会専門調査委員)



図3 サワヒメスゲ



図4 テリハキンバイ



図5 ヒメクラマゴケ

ほとんどが絶滅の危機！ 愛知県の淡水産二枚貝

木村 昭一

愛知県は木曾川、豊川、そして矢作川水系と豊かな水源を持つ水系に恵まれ、平野部にはその支流や農業用水路、ため池が発達し、多くの淡水産貝類の生息に適した地域でした。また、愛知県は豊かな淡水貝類の生息する琵琶湖水系との関わりのある東限の地域として多様な淡水産貝類が生息していました。しかし、豊かな淡水産貝類相が残されていたのは1960年代まででした。平野部の河川は各種排水等によって水が汚れ、県内の淡水産貝類の生息状況は非常に悪くなりました。また河川改修や護岸工事、農業用水路の整備によって生息場所自体がなくなった例も少なくありません。また、1990年代からカワヒバリガイやカネツケシジミ（台湾シジミの黄色型）などの外来種が住み着き、淡水産貝類の生息にとってますます厳しい状況になっています。

◆イシガイ科貝類は愛知県から3種が絶滅

現在の淡水産貝類の多くは、限られた範囲にたろうじて生き残った小規模な集まりが見つかる場合が多く、絶滅したと考えられる種も少なくありません。特に川の下流域や平野部の水路などの流れが緩やかな砂泥底にはイシガイ科貝類が多く分布しています。イシガイ科貝類は美しい淡水魚であるタナゴ類の産卵場所を提供する二枚貝として有名です。しかし、人の生活場所と近い川の下流域の生息環境は県内では壊滅的状况で、イシガイ科貝類全般の生息が危機にさらされています。特にハコネシジラガイ（図1）、オバエボシガイ（図

2）、カタハガイ（図3）は愛知県から絶滅したと判断されています。このことは愛知県版レッドデータブック（2002）ではじめて明らかにされ、その後の愛知県版レッドデータブック（2009）の見直し調査でも3種の生息場所は発見されませんでした。

◆つい最近絶滅危惧種になってしまったマシジミ

マシジミ（図4）は愛知県の平野部の河川、湖沼

にごく普通に生息していた淡水産二枚貝であり、愛知県版レッドデータブック（2002）の調査の時点では、イシガイ科二枚貝がいないような場所でも、マシジミだけは普通に生息していました。ところが、1990年代にアジア大陸が原産地と考えられるカネツケシジミ（図5）が愛知県にも入ってきて住み着き、マシジミ

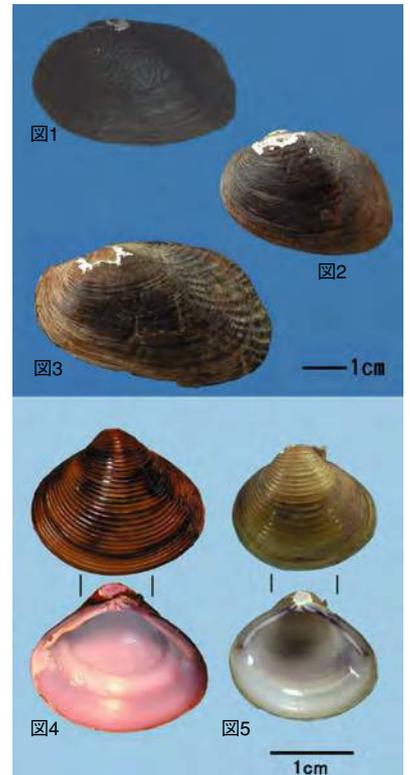


表1 愛知県の淡水産二枚貝と愛知県レッドデータブック（2009）のランク

イガイ科	<i>Limnoperna fortunei</i> (Dunker) カワヒバリガイ（移入種）
イシガイ科	<i>Unio douglasiae nipponensis</i> Martens イシガイ（絶滅危惧Ⅰ類）
	<i>Lanceolaria grayana</i> (Lea) トンガリササノハガイ（絶滅危惧Ⅰ類）
	<i>Inversidens japonensis</i> (Lea) マツカサガイ（絶滅危惧Ⅰ類）
	<i>Inversidens brandti</i> (Kobert) オバエボシガイ（絶滅）（図2）
	<i>Inversiunio yokohamensis</i> (Ihering) ヨコハマシジラガイ（絶滅）（図1）
	<i>Cristaria plicata</i> (Leach) カラスガイ（情報不足）
シジミ科	<i>Anodonta woodiana</i> (Lea) ドブガイ（ヌマガイ・タガイを含む）（準絶滅危惧）
	<i>Pseudodon omiensis</i> (Heimburg) カタハガイ（絶滅）（図3）
	<i>Corbicula japonica</i> Prime ヤマトシジミ（主に汽水域に分布）
マメシジミ科	<i>Corbicula leana</i> Prime マシジミ（絶滅危惧Ⅱ類）（図4）
	<i>Corbicula fluminea</i> (Muller) カネツケシジミ（台湾シジミの黄色型）（移入種）（図5）
	<i>Sphaerium japonica</i> (Westerlund) ドブシジミ
	<i>Psidium nipponense</i> Kuroda ニッポンマメシジミ（情報不足）

の分布域の多くで、カネツケシジミと置き換わっていることが確認されました。私が豊田市内で2002年7月から8月にかけて5回に渡って調査した例では、カネツケシジミが広い範囲に住み着き、その反面1997年の調査時と比較してマシジミの生息場所、生息数ともに著しく減少していました。このことについては、豊田市自然環境基礎調査（2005）に詳しく報告しました。2006年からの愛知県下の他の河川でも下流域や水路等には、カネツケシジミが繁殖し、マシジミはほとんど見られなくなっていました。また、貝殻の特徴でマシジミと判断した個体でも、近くにカネツケシジミが生息している場合には遺伝子がカネツケシジミと混ざっている可能性が高いこともわかりました。

◆12種のうち7種が絶滅もしくは絶滅寸前の愛知県の淡水産二枚貝

表1に愛知県の淡水産二枚貝と愛知県レッドデータブック（2009）のランクをまとめました。今愛知県に生息している淡水産二枚貝は14種で、元々愛知県に生息していた種が12種、そのうち7種が絶滅もしくは絶滅危惧Ⅱ類以上の絶滅が非常に心配される種です。その反面、2種の移入種の生息場所、個体数は増加傾向にあり、今後の生息状況も調査していく必要があります。現在新修豊田市史の編纂が行われているようですが、是非淡水産貝類の最新の調査も行っていただきたいと思います。

（きむら しょういち、日本貝類学会評議員）

矢作川のいきもの オオミズアオ

翅（羽）を広げると10cm以上になり、全体が水色～黄緑色の綺麗なガ。英名を「月のガ（Luna Mothあるいは Moon Moth）」と言うそうだ。幼虫がカバノキ科、ブナ科、バラ科など多くの広葉樹を食べ、4月頃から夏にかけて発生するので、丘陵地などで比較的良好に見られる。種名決定には非常によく似たオナガミズアオというハンノキを食べる種もいるので注意が必要だ。



第5回「矢作川 森の健康診断」が開催されました！

6月6日（土）、第5回となる市民参加型の人工林調査「矢作川 森の健康診断」が開催されました。早朝に通り雨が降りましたが、足助支所で開会式が始まる頃にはすっかりやんで、約270名の参加者が39の班に分かれて元気に豊田市内の各調査地に向かい、70地点を調査してきました。今年の新しい試みは「オプション調査」で、リピーターを中心に構成された6つの班がいつもの調査に加え、「緑のダム実験」「土壌動物調査」「植生調査+α（林の成り立ちと将来を考える）」のいずれかを行いました。矢作川研究所の間野研究員は「土壌動物調査」、洲

崎研究員は「植生調査+α」を担当し、参加者の方々に一歩踏み込んだ「森の健康診断」を体感して頂くために一役買いました。



後記

5月に引き続き、生物多様性を特集したシリーズの第2弾です。愛知県でも身近な環境で多くの生物種が絶滅に瀕していることを理解し、危機感を持つことが必要でしょう。本号が少しでも生物多様性について考えるきっかけになれば幸いです。（間）